

2022年11月9日(水)

月食を楽しむ

忘むといひて 影にあたらぬ 今宵しも

われて月みる 名や立ちぬらむ

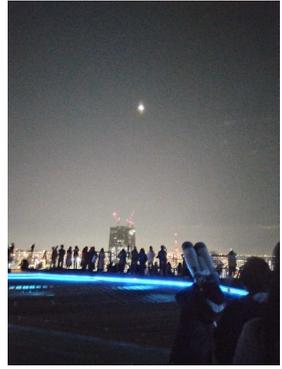
西行『山家集』

この歌の意味は、「世間で不吉だと言われる月蝕(月食)の光にも当たらないようにしているが、今宵、そんな月であればなおさら、無理をしてでも見ようと思う。変わり者だという良からぬ評判が立たなければ良いのだが」ということになるでしょう。もちろん、月食とは、地球が太陽と月の間に入り込むことで、月がちょうど影になって見えなくなる現象を言いますが、平安時代の日本では満月が一時的に欠けることを不吉な予兆と捉えていたことが、この歌からも分かります。

さて、昨日8日はほぼ全国的に皆既月食が見られましたが、私は偶然にも当選者80名という高倍率の抽選をくぐり抜け、六本木ヒルズの東京スカイデッキで開催された観月会に出かけて来ました。そこは関東随一の海拔270mという森タワー屋上にあるオープンエアの展望台で、東京タワー、スカイツリーと一緒に観察できる特別な場所でした。六本木天文クラブの方々が、3台の天



体望遠鏡を使って詳しく説明をしてくださいました。ただ、スカイデッキは安全上、スマートフォン以外の持ち物の持ち込みは認められておらず、写真はプロの皆さんにお任せし、東京タワーの上に浮かぶ 442 年ぶりという皆既月食と惑星(天王星)食を楽しみました。むしろカメラのレンズを通さずに肉眼で見る月は、いろいろなことを考える機会を与えてくれました。



人類が本格的に月へ行く時代ですが、地球の影に入って赤銅色に見える月は、肉眼で見ているだけで日常を離れもっと奥深い何かを語り掛けているようでした。ウクライナを始めとする各地の戦争や紛争、韓国での人災とも言える事故など、世界の平和と安全を祈らずにはられません。

また、初めて望遠鏡で見た小さく青白く輝く天王星が月と重なって消えていく様はとても神秘的でした。併せて、明るく輝く土星-木星-月-火星が弧を描いて並ぶ夜空を楽しむことができました。天文クラブの方の説明を聞いた後で、スマートフォンの星座表アプリを使って復習しながら、ぎょしゃ座のカペラ、おうし座のアルデバラン、みなみうお座のフォーマルハウト、秋の四角形などを確認することもできました。

皆さんは、赤い月を眺めて何を感じられたでしょうか。

スカイデッキには多くのテレビ局や新聞社の取材陣が駆けつけており、私も韓国のテレビ局と TBS のインタビューを受けましたが、ちゃっかりと夜と今朝の TBS ニュースに私の姿がありました。

西行, 佐々木 信綱校訂 (1928) 『新訂 山家集』岩波文庫, 320 頁.

湯浅 吉美 (2010) 中世びとの月蝕観 - 『玉葉』と『吾妻鏡』の記事から見て「埼玉学園大学 人間学部篇」10, pp.63-76.